

## 竹田車站池上文庫的故事

文責 傅玉香

池上一郎（1911.1.16-2001）東京帝國大學醫學部畢業，二次大戰爆發後徵調為軍醫，1943年間來到設於竹田的野戰醫院之擔任院長，因此而與台灣結下不解之緣。根據地方人士解說與新聞報導可知，竹田醫師在戰時經常為鄉民義診，獲得鄉民敬仰，在職約兩年後離台。戰後，他不僅濟助從台灣留日學生，同時也常掛念一直掛念著竹田這個地方，因而在人生的最終，他決定捐出其平生的藏書，回饋自己的眷念的第二故鄉。2001年，90歲高齡的池上博士捐出藏書與百萬日圓，竹田地方人士為他建立池上文庫。但開幕才三個月，還未能親自來參觀前，他就不幸在日本過世了。儘管如此，在其友人協助與地方人士支持之下，池上文庫很快就成立，至今（2017）已經超過16年。目前，地方人士選定每年1月16日池上博士的冥誕為文庫之紀念日，在這一天地方人士都會邀集日方人士，共同舉行紀念活動。如今，池上文庫營運與每年的紀念活動，已經成為台日交流的佳話。

池上博士為何要把藏書捐給竹田鄉？而地方人士為何如此珍惜維護這批圖書呢？我想應該說雙方都很「惜情」吧！戰後，除了極少數的例外，所有居留台灣的日本軍人與平民，都很平順地被遣送回日本。而且，離開台灣時，很多日本人與當地居民是珍重話別，而後甚至保持聯繫，或相隔多年後重新聯絡上，進而互訪而得以重逢。這樣的情況，跟日本戰前的其他殖民地或佔領地，原本就有很大的不同。也因此讓台灣與日本之間，雖歷經多年威權體制的壓迫，但一旦民主化與本土化落實，兩地民眾或團體很自然地就能再續前緣，展開各種層面的交流，這也是池上文庫出現的背景。

殖民地統治者與被統治者的關係，當然會有差別待遇等不愉快的事情；戰後台灣成為日本投資的加工出口基地，經濟地位上存在不平等的關係。歷史上，雙方確實有諸多的衝突與對立，但是，念舊是人類共通的情感，拋開政治關係或國界的羈束，每個人都會懷念起自己的青春歲月。因此，有很多台灣人在事業有成並邁入中年之後，往往都會懷念起公學校或其他階段學校的日本老師，有人到日本拜訪老師，有些人邀請他們到台灣環島旅遊，表達他們的思念與感恩。相對地，很多站前曾經居留台灣的日本人，也經常返台旅遊並拜訪舊識，不斷訴說他們對台灣愛戀。當年負責編輯《民俗台灣》，致力保存台灣民俗的文化人池田敏雄、畫家立石鐵臣等，其戰後思念台灣的文章與畫作，早已聞名於世。近幾年，在台北帝國大學任教的金關丈夫與國分直一，將生前所有的藏書與研究成果全數捐贈台大，更成為台日學術傳承的佳話。而池上文庫的成立，則已成為台日民間人士耕耘地方交流的典範。

19世紀是帝國主義的擴張期，殖民地的壓迫與反抗到處可見，20世紀是戰爭的世紀，眾多慘烈的史事更令人痛心。當我們回顧這些不幸的世界史時，當然要避免美化殖民統治或淡化外來政權的壓迫，但同時也應該知道，在各個苦難的年代，還是有一些令人感動的人物與故事，台灣與日本之間也是如此。而池上文庫的誕生與發展過程，就是最值得我們珍惜的實例。

探詢各界人士之後，可以發現大家都一致表示：「希望文庫能成為海外日僑交流的據點，以及台灣人學習日文的一個起點。」當然，竹田不僅只有池上文庫。若要全面地了解這個地方，來到竹田車站時，請別忘了順道參觀：『池上一郎博士文庫紀念館』、『李秀雲先生攝影紀念館』、『竹田文化館』這三個重要的景點，如此才能更了解竹田的歷史與文化。

參考資料：竹田驛園：<http://www.peopo.org/news/333215>

## 竹田駅池上文庫の物語

池上一郎博士（1911.1.16-2001）は東京帝国大学医学部を卒業後、第二次世界大戦が始まって軍医となり、1943年に当時竹田にあった野戦病院の院長として、この土地に赴任してきました。これが、池上博士と台湾の間に縁が結ばれたきっかけです。現地の人々の話や新聞記事によると、池上博士は戦時中、地元住民の病気を診てあげたことから、彼らに深く敬愛されたそうです。博士は任期を終えて二年で台湾を離れてしまったのですが、日本へ帰ると、日本にいる台湾人留学生に支援をするなど温かい手をさしのべたそうです。彼の竹田への思いがよほど深かった証だといえるでしょう。晩年になると、彼が第二の故郷として懐かしんだ竹田駅に蔵書を寄贈することを、彼は決めました。

そして2001年、90歳の高齢に達した博士は、百万円の現金とともに自分の蔵書を竹田駅に贈りました。町の人々は駅に「池上文庫」と名付けた空間を設け、ここに博士が贈ってくれた日本語書籍を保管しました。残念なことに、文庫の開幕から三か月、博士は自分の足でこの文庫を参観することなく、この世を去ってしまいました。その後……池上博士の友人や地元の人々の支援を受け、池上文庫は2017年の今でも運営され続けています。また、池上博士の誕生日である1月16日を文庫の記念日とし、この日には地元の人々や日本からの訪問客がともに記念活動を行なっています。こうして、池上文庫の日々の運営と毎年の記念活動は、今や台湾・日本両国の国際交流としてすっかり定着しました。

ところで、池上博士はどのようにして竹田に自分の本を寄付しようと思いついたのでしょうか？また、地元の人々はどのようにしてこれらの書籍を大事にしようと思ったのでしょうか？きっと、彼らはともに「人の情けを大切に」したかったからではないでしょうか。1945年に戦争が終わり、一部の人々を除き、台湾に住んでいた大多数の民間人や軍人は、日本へ引き揚げていきました。その際、多くの日本人は、自分の身近にいた台湾人と別れを惜しみ、離れ離れになってからも連絡が途切れないようにしたといいます。このような状況は、他の植民地・占領地とは大きく異なります。台湾では戦後、長きにわたる独裁政治体制を経て、民主化そして本土化が進みましたが、そこでかつての隣人たちは互いの交流を自然とよみがえらせ、いろんな形での交流を始めました。これが、池上文庫が誕生するに至った社会的背景です。

植民地時代においては、日本人と台湾人は統治者と被統治者の関係にあったため、不幸な差別待遇などがもちろんありました。また戦後においては、台湾は加工輸出基地として日本の投資先となり、経済的にやはり不平等な位置に置かれました。歴史的にも、双方の間には確かにいくつもの衝突や対立がありました。しかし、昔を懐かしむという人類共通の情感は、政治や国境といった制限をとりはらってくれることがあります。人はみな、自分が輝いていた頃が愛しく思えるものです。

台湾人の多くは事業を軌道にのせ、中年の域に入った頃、公学校その他の学校時代に出会った日本人教師を懐かしむようになり、彼らは日本まで自分の恩師を訪ねに行ったり、逆に恩師を台湾一周の旅に招いたりして、昔への思いや感謝の気持ちを表すようになりました。また、台湾にかつて住んでいた日本人たちも自ら台湾へ訪れ、昔の知人を訪ねて旧交を温めたり、自分がいかに台湾を愛していたかを語るようになりました。例えば、戦時中に発行されていた雑誌『民俗台湾』の編集者で、台湾の民俗風習を保存しようと尽力した文化人池田敏雄や画家の立石鉄臣らは、戦後台湾を懐かしむ文章を書いたり、絵を発表したりしました。台北帝国大学教授だった金関丈夫や国分直一は、生前に所有していた蔵書や研究成果を全て台湾大学に寄贈しましたが、このことは台湾・日本の学术界で美談として語り継がれています。池上文庫は、民間人たちがはぐくんだこのような交流の、最も典型的な例の一つではないでしょうか。

19世紀は帝国主義の拡張期で、植民地への圧迫やそれに対する反抗がこちらで見られました。20世紀は戦争の世紀で、多くの悲惨な出来事が人々の記憶に残りました。これら不幸な世界史を振り返る時、植民統治を美化したり、外来政権からの圧迫を忘れ去ることは、決してすべきことではありません。しかしそれと同時に、こうした苦難の時代において、素晴らしい人物や心温まる物語があったことも、我々は知っておくべきでしょう。台湾と日本の間についてもそうです。池上文庫の誕生と発展は、我々が大事にすべきことを実例として示してくれています。

近年、台湾・日本の各界の人々が「文庫を海外日僑の交流拠点に、また台湾人が日本語を学ぶ出発点にしていきたい」と話しています。もちろん、竹田郷はもともと人情の厚い、豊かな物産に恵まれた素晴らしい土地です。池上文庫だけではなく、他にもたくさんの魅力を持った所です。周辺エリアについてはここでは触れませんが、竹田駅ではこの「池上一郎博士文庫記念館」はもちろんのこと、「李秀雲先生撮影記念館」や「竹田文化館」も、竹田の歴史や文化を知ることができる施設です。ぜひお立ち寄りください。

参考資料：竹田駅園 <http://www.peopo.org/news/333215>